Title	ロジャース・ブルーベイカーの認知的視座と「ハーフ」研究への援用可能性
Sub Title	"Cognitive perspective" by Rogers Brubaker and the implications for the studies of haafu in Japan
Author	佐藤, 祐菜(Satō, Yuna)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.140- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ビューポイント
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロジャース・ブルーベイカーの認知的視座と「ハーフ」研究への援用可能性¹⁾

“Cognitive Perspective” by Rogers Brubaker and the Implications for the Studies of *Haafu* in Japan

佐藤 祐菜

今日、“mixed race”や「ハーフ」などと呼ばれうる人々の存在感が国内外で増している。それに伴い、社会学や文化人類学などにおける人種・エスニシティ研究でも、彼・彼女らを対象としたものが徐々に増加している。このような背景を踏まえ、本稿は人種・エスニシティ・ネーション研究で著名な Rogers Brubaker の提唱する認知的視座 (Cognitive perspectives) が、日本社会における「ハーフ」、「混血」、「ダブル」、「ミックス」といったカテゴリ・人々を対象とする研究にいかなる可能性をもたらすのかという問いを検討する。

1. 認知的視座とは何か

まずは認知的視座とはどのようなアプローチであるかを、Brubaker の著作やそれを解説する先行研究を基に整理したい。認知的視座とは、一言でいうと、人種・エスニシティ・ネーションの認知的側面を重視する立場である。すなわち、それらを「世界のなかの事物」ではなく、「世界についての見方」(Brubaker, Loveman, and Stamatov 2004=2016: 237) という主観的なものと捉える。だが、このアプローチは、人々の心理と実践とを架橋しようとする立場であり、極端な心理主義ではない (Brubaker et al. 2004=2016: 258)。つまり、客観的には実在しないはずの人種・エスニシティ・ネーションが、社会的実践においていかに影響力を持って用いられているのかという問いを追究する (佐藤 2017: 24)。

しかし、ここで一つ疑問が湧く。それは、1980 年代以降定着し今日まで支配的であり続けている構築主義との違いは何かという点である (佐藤 2017)。この問いに対し、Brubaker らは従来の構築主義は政治的活動家や知識人などエリートによる人種・エスニシティ・ネーションの構築過程に着目してきたものの、「一般人」によるそれらの構築過程は見逃してきたと述べる。だが、認知的視座に依拠すれば、その分析が可能になる (Brubaker et al. 2004=2016:269-70)。つまり、認知的視座は構築主義を否定するものではなく、それを包括するアプローチである (Brubaker et al. 2004=2016; 佐藤 2017)。

しかし、構築主義的なアプローチによる研究でも、「一般人」による構築過程を論じる研究は存在する (たとえば、Cornell and Hartman 1998 ほか)。それよりは、構築主義ではあまり明示されない人々による認知や解釈の過程に着目することで、認知的視座は人種・エスニシティ・ネーションの構築過程をより細やかに分析できるのではないだろうか。

佐藤祐菜「ビューポイント：ロジャース・ブルーベイカーの認知的視座と「ハーフ」研究への援用可能性」

『三田社会学』第 24 号 (2019 年 7 月) 140-144 頁

Brubaker らの著作に依拠すれば、このような認知的視座の特長は以下の三つにまとめられる。第一に、人種・エスニシティ・ネーションの三つを一つの枠組みで論じることができる点である (Brubaker et al. 2004=2016: 262-3)。これらの領域は分析において区別されることが多い (Brubaker et al. 2004=2016: 261)。一例を挙げれば、人種を身体的特徴による分類とする一方、エスニシティを文化や歴史、出自を共有するエスニック集団によるアイデンティフィケーションとして区別することがある (Cornell and Hartman 1998)。しかし、そのような区別には問題がある (佐藤 2017)。まず、それぞれの領域でほぼ同じ議論がされていても、お互い十分に参照されない (佐藤 2017: 27)。また、それらの区別は研究者の立場や地域などに左右される恣意的なものであるし、研究者と「当事者」との間にズレが生じることもある (佐藤 2017)。上述の例でいえば、研究者が人種と捉えるカテゴリ (たとえば、「白人」) を、「当事者」は文化的あるいはナショナルな意味を込めて用いているという報告がある (Aspinall and Song 2013)。だが、認知的視座に立てば、人種・エスニシティ・ネーションを同じ土壌で論じることができる。なぜなら、これらを認知の問題と捉えれば、そのメカニズムは根本的には同一だからである (Brubaker et al. 2004=2016: 262-3)。

第二に、エスニシティに対するアプローチとして相反するものと捉えられてきた原書主義と状況主義を相互補完的なものとして解釈することができる (Brubaker et al. 2004=2016: 246-68)。前者は根源的で変わらないものとして、後者は状況によって創造・強調されるものとしてエスニシティを想定している (Cornell and Hartman 1998)。しかし、認知的視座によれば、両者は問題とする点が異なる。前者は「当事者」が人々の差異を本質化する傾向を説明するものである一方、後者はいかなる場面でそれが重要になるのかを説明するものである (Brubaker et al. 2004=2016: 246-68)。

第三に、認知的視座によって、集団に依拠しないエスニシティ・人種・ネーションを捉えることが可能になる (Brubaker 2002)。従来これらの研究では、エスニック集団、人種、ネーションを利害関係や行為を同一にする境界のある実体とみなす傾向があった (Brubaker 2002)。実際、構築主義的なアプローチの研究においても、エスニシティはエスニック集団が持つあるいは表現するものとされてきた (たとえば Cornell and Hartman 1998: 17)。Brubaker はこれを集団主義 (Groupism) ²⁾ と呼び、批判する (Brubaker 2002: 164)。なぜならば、エスニシティ・人種・ネーションは実践のカテゴリであって、実体を伴う集団ではないからである (Brubaker 2002: 167)。帰属感を伴う「集団性 (Groupness)」は強まることも弱まることもある変数である (Brubaker 2016: 13)。そのため、集団によらないエスニシティの作用も研究対象とされるべきである (Brubaker 2016)。

2. 「ハーフ」研究への援用可能性

それでは上述の認知的視座は、主に人種・エスニシティ研究として位置づけられてきた「ハーフ」研究にいかなる可能性をもたらすのか。本稿はこのアプローチが、「ハーフ」研究の抱え

る以下の二つの問題点を解消する理論的基盤になると主張する。

第一に、「ハーフ」は必ずしも集団ではないという問題点である。自らを「韓国人」や「スウェーデン人」などと理解したり、表現したりする人がいるのと同様に、自らを「ハーフ」と理解したり、表現したりする人がいることは容易に想像できるだろう。しかし、エスニック集団の存在を前提とする従来のエスニシティの捉え方では、集団ではない「ハーフ」という理解・表現はエスニシティではないということになってしまう。

実際にそのような捉え方の弊害は研究に表れている。田口(下地)ローレンス吉孝によれば、日本における移民・エスニシティ研究では、異なるエスニック・グループが研究対象とされることが多かった。その結果、エスニック集団や人種集団に必ずしも還元されない「ハーフ」や「混血」は分析から外されたり、例外化されたりする傾向にあったという(田口ローレンス 2017)。

第二に、「ハーフ」は人種やエスニシティの定義に必ずしも当てはまらないという問題点である。まず、「ハーフ」と呼ばれる人々は、エスニシティの定義とされる「共通の文化」や「共通の出自」を必ずしも共有していない。さらに、「ハーフ」イメージは「白人」化されている一方で、必ずしも「白人」系の人々を指すわけではない。つまり、同一の人種カテゴリを共有しているわけではない。すなわち「ハーフ」は、人種・エスニシティ研究に位置づけられつつも、それらの定義のどちらにも当てはまらないという矛盾を抱えている。

以上の二つの問題点に対して、認知的視座は有用である。まず、認知的視座によれば、エスニック集団や人種集団は実存するわけではない。実存するのはそれらのカテゴリを用いた実践である(Brubaker 2002: 167)。Brubaker が意図しているように、認知的視座に依拠すれば、集団という形ではないエスニシティ、すなわち「ハーフ」も捉えられる。

第二の問題点も解決できる。なぜならば認知的視座によれば、人種やエスニシティの定義それ自体を追究することよりも、いかにそれらの観点から人々に経験・解釈されるのかを問う必要があるからである(Brubaker et al. 2004=2016: 270)。実際人々が持つ「ハーフ」への定義は人によっても場面によっても異なりうるため、明確な定義をすることはできないだろう。むしろそのカテゴリを用いた実践を分析し、それがいかにしてリアルに感じられるのかを分析する必要がある。以上の観点からすれば、エスニシティと人種を統合させたエスノレイスとして、ひとまず「ハーフ」を記述することも一つの研究戦略ではないだろうか。

3. 今後の「ハーフ」研究への示唆

以上本稿では、Brubaker らによって提唱された人種・エスニシティ・ネーションを「世界に対する見方」と捉える認知的視座を整理し、「ハーフ」研究への援用可能性を検討した。要約すれば、「ハーフ」研究が抱える、①必ずしも集団ではなく、②人種・エスニシティの定義に必ずしも合致しないという二つの問題点を、認知的視座に依拠すれば解消できる。

しかし近年、単一のエスニック集団や人種集団に還元されないために分析から疎外されてき

たはずの「ハーフ」研究（田口ローレンス 2017）が、利害関係を共にしつつ、境界のある「集団」としての「ハーフ」をしばしば想定している。この点について有賀ゆうアニース³⁾は、これらの研究では分析者の側が一方的に対象者を「ハーフ」と位置づけるという傾向があると指摘する。そのような集団主義の傾向は、「ハーフ」を理由とする差別や偏見の問題を明かし、立ち向かうための戦略的本質主義の観点からは意義があるかもしれない。だが、有賀が指摘するように、そのカテゴリを用いた人々の実践は分析できない。筆者なりに言い換えれば、人々がいかに「ハーフ」になるのか／ならないのか、誰が「ハーフ」カテゴリの中心になりえ、誰が周縁になりえるのか、といった問いは集団主義からは十分には見えてこない。「ハーフ」研究は今一度、その手法の意義と限界を見つめなおす必要がある。

【註】

- 1) 本稿は修士論文（2018年度）の一部を基に加筆・修正を行ったものである。
- 2) ここでいう集団主義（Groupism）とは、個人よりも周囲との協調を重んじる性質という意味の集団主義とは異なる。
- 3) 有賀ゆうアニース、2018年8月7日に東京大学本郷キャンパスにて行われた非公式の「ハーフ」研究会での発表資料を参照。なお掲載にあたっては、本人の許可を得ている。

【文献】

- Aspinall, Peter J, and Miri Song, 2013, *Mixed Race Identities*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Brubaker, Rogers, 2002, "Ethnicity without Groups," *European Journal of Sociology/Archives Européennes De Sociologie*, 43 (2): 163-189, (Retrieved May 15, 2018, <https://doi.org/10.1017/S0003975602001066>).
- , (佐藤成基訳), 2016, 「集団からカテゴリーへ——エスニシティ, ナショナリズム, 移民, シティズンシップに関する三十余年間の研究をふり返って」佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編『グローバル化する世界と「帰属の政治」——移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店, 9-33.
- Brubaker, Rogers, Mara Loveman and Peter Stamatov, 2004, "Ethnicity as Cognition," *Theory and Society*, 33: 31-64. Reprinted in *Ethnicity without Groups*, Cambridge: Harvard University Press, 64-87. (佐藤成基訳, 2016, 「認知としてのエスニシティ」佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編『グローバル化する世界と「帰属の政治」——移民・シティズンシップ・国民国家』明石書店, 235-287.)
- Cornell, Stephen and Douglas Hartman, 1998, *Ethnicity and Race : Making Identities in A Changing World*, Thousand Oaks: Pipe Forge Press.
- 佐藤成基, 2017, 「カテゴリーとしての人種, エスニシティ, ネーション——ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて」『社会志林』64(1): 21-48, (2018年7月29日取得, 法政大学機関リポジトリ).

田口ローレンス吉孝, 2017, 「戦後日本における『混血』『ハーフ』をめぐる人種編成——<日本人化/外国人化>人種プロジェクトの歴史的な展開」一橋大学大学院社会学研究科 2017 年度博士論文.

(さとう ゆな 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程)